

本からの贈り物

© MPC

「本の魅力」は、何かを気付かせてくれたり、勇気づけてくれたりする事

インドネシアの人々が証言する 日本軍政の真実



インドネシアの人々
[桜の花出版(編集)]
定価 ¥ 1,470 (税込)

太平洋戦争(大東亜戦争)は、
侵略戦争ではなかった…

何と言っても、インドネシアが
独立出来たのは、日本のお陰です。
日本が、オランダの統治を破壊して
くれたからです。

* (「デヴィ夫人」談より抜粋)

日本人は、この2600年余の間に、
独自の日本民族の誇りと威厳を培って
きました。ところがそれをたった一度
の戦争でなくしてしまうなんて、こん
な情けないことはありません。

今の若い人達は、まず自分達のルーツ
を知るべきであり、自分達の歴史を知
るべきでは無いでしょうか。

そして是非とも、この歪んでしまった
日本になんとしても誇り、そして威厳
を取り戻していきたいと思います。

《前出の、フランス在住の「カッパさん」より》

何十年前も前日本で、トイレットペーパー騒動のあった
石油危機の時、一番困っていた我が国を助けてくれたの
は、インドネシアだったんですね。

石油を売ってもらう為に、アラブの王様と話をしよう
にも、彼らは仲介なしには会ってはいけません。その仲
介を買って出してくれたのがインドネシア。インドネシア
はイスラム世界の長でもあったのですが、なぜ助けてくれ
たかというところ。戦争中、当時オランダの植民地だっ
たインドネシアから、オランダ軍を追い出したのは日本軍
でした。その日本軍によって創設された、現地人義勇軍が
中心となってインドネシア人は、日本敗戦後に再び戻っ
てきたオランダ軍と戦って独立を勝ち得たんですね。

(この時、千人以上の日本人も残って一緒に戦っているんですね)

…この話、フランスの教科書にチラリと載っていますけど、
それで私も調べたのですけど。

インドネシアは恩返しをしてくれたのですね。

何か嬉しいですよ、日本人として。

そして私は言いたいです。

言いたい事…お分かりでしょうか…。そうですね！

「どうしてこの話がフランスの教科書に載っていて、日本
の教科書には載っていないのか？」って事なんですよね。

国民の教育



「この本の題名は『国民の教育』
「子供の」ではない…」

渡部昇一

[産経新聞社]

定価 ¥ 1,800 (税込)

《milestaさんのブログより》

海外での子育ては恐ろしいと、時々思う。親の教育方針が純粹に子供に伝わり、子供を見ればどのようになっているかがわかってしまうからだ。なぜ、そのようなことになるのかというと、まず、住んでいる国と日本との価値観や習慣が違い、どちらを選択するかは親次第だからである。家では靴を脱ぐのか、女の子でもあぐらをかいてもいいのか、食事の前に「いただきます」と言うのか黙って食べ始めるのか、神様とはジーザス一人のことなのか・・・。そして日本と違って「友達と一緒」である

ことに重きを置かないので、自分の意思、価値観は尊重される。様々な場面で、「どちらの考えを選択するか。」「何を与え、何を与えないか。」「どこまで許容するか。」などを迫られる。教育方針を定め、それに基づいて交通整理をしなければ、身が持たない。こちらで生活を始めてすぐ、そう気づいた頃に、ちょうどこの本を読んだ。

ここに書かれているのは、躰や教育の表層的なノウハウではなく、現代の教育の問題点や理想の教育についてである。教育といっても、「テストで良い点を取る」「良い学校に入る」ことだけでなく、人格とか思考力や視野の広さなどを念頭に置いていることに、大変共感を覚えた。

現代の家庭教育に欠けているものは何か、日本の社会が硬直しているのはなぜか・・・ 中略

またここには、今の教育は日本と日本人についてきちんと教えていな

い、ということが書かれていたが、我が家は、日本や日本人についてある程度は知っていなければならぬ環境に置かれている。学校の先生でも時々日本と中国を混同していたりして、うっかりするとんでもないことを教えられてしまう。また我が子たちは日本人であるからと、授業で日本についての説明を求められることもある。

・・・ 中略

オーストラリアの学校教育を受けて、これは良いと思ったところは、多様性を認め、個性を伸ばし、失敗しても再チャレンジができることである。これらは、この本の中で、日本の教育に欠けているものとして挙げられていることばかりだ。

日本の教育、特にエリートに進む道は、小さい頃から熱心に受験勉強して、東大に入り、官僚になるという単線で、人間としても、国としても、脆弱であると書かれている。詳細は省くが、この脆弱さの説明には、

非常に納得のいくものがあり、エリートコースから一度外れた「ステッブ・アウト」の経験を評価しようという提案には大賛成だ。

我が子たちは、エリートとはほど遠い人生を歩むだろうが、外国の学校に通うというステップ・アウトをしたおかげで得たものがたくさんあり、それは一生の宝物になるだろう。孤独に耐えられる強さ、わからないことをわからないと言える素直さ、異なる文化や考え方の存在を知ったこと、そういう違いを踏まえた友情の築き方、それには自己の確立と寛容の心が必要だということ。そしてこの本に書かれているのを見て気づいたのだが、「嫉妬心」をあまり抱かず優れた人を的確に評価することも、多様性や個性を重視するこちらで学んだことだ。机に向かつて勉強だけしていたのでは学べないことばかりである。

子供の教育の話ばかりを書いてしまったが、この本の題名は『国民の教

育』である。「子供の」ではない。子供の教育には、親、学校、社会が影響を与える。それは海外暮らしに限ったことではない。大人たちが子供たちの教育について真剣に考えなければならぬのは、どこに住んでいても同じことだ。その為には大人たちも正しい知識を持ち、子供の手本となり、きちんとした教育理念を持たなければならぬ。国民を、そう教育してくれる本であるのだ。

私にとっては海外での子育てというのがよいきっかけとなったが、日本の皆さんも、子供のいない方も、ぜひこの本を読んでみて欲しいと思う。

——（編集部より）——

近頃、「品格本」や「日本のしきたり本」「皇室入門本」などが、よく目に付きませんか？

日本特有の、神道と仏教が融合した宗教観が薄れてしまい、心の支えが無くなつてきて、社会が乱れてきたのを、皆が

肌で感じたから需要が増えたのでしょうか。今、何となく不安な人が増えてい

るんでしょうね。
学校教育の現場から「道徳」の授業が駆逐されて何年経ったことでしょう。

世間のお母さん達は、とっても不安な

のではないのかな…と思います。
他にも、このような本がありますね。

国家の品格



藤原正彦
[新潮新書]
定価 ¥ 714 (税込)

戦後教育で失われたもの



森口朗
[新潮新書]
定価 ¥ 714 (税込)

もちろん賛否両論はあります。